TAT再考

海　本　理恵子

1．はじめに

TATは主題統覚検査(Thematic Appercetion Test)の略称であり，絵の情景とその中に描かれた人物に関連して，物語を創作させる心理テストである。TATは心理テストの中でも投影法に位置づけられる。心理テストには，判定や結果が求められるが，現在に至るまでTATには確立した解釈法・分析法が存在せず，広く共有される分類法，得点化，判定法はない。そのことは，TATが分類や得点化，判定などの標準化にはそぐわないテストであるということを示している。TATの創始者のMurray(1935，1938)は，無意識のコンプレックスを引き出すものとしてTATを考案した。TATで表現された物語（以後TAT物語）に，創り手のどのような特性が現れるのか，様々な研究がなされ，いくつかの分析方法や解釈仮説が提案されているが，現在の実際の臨床場面では，解釈は，検査者が被検者のTAT物語をいかに読むかに委ねられている。TATにおいて，読み手は，その物語を語った創り手と同等に重要である。TATの反応結果は物語という形で表される。物語は，創り手と読み手がいて成立する。一個体としての読み手が物語からどんな印象を持ったのか，どんなことを考えたのか。物語を読んだ際の読み手の内部に起こってくる直観，感覚，感情，思考など，機械的に分類することはできない領域こそ，TAT物語を捉える根幹となるのではないだろうか。

TATの誕生より，現在までの研究を追うことで，TAT解釈について考察し，物語の読み手としての検査者の重要性を示すことを本論文の目的とする。また，TATの初期段階の使用となるMurray＆Morgan(1938)らの，「アーンストの事例」は，TATの原点を知ることができる重要な文献である。この文献は，TAT研究においてあまり取り上げられることはないが，TAT実践家としてのMorganの態度を知る上でも，また，TATの当時の使用状況を知る上でも，これを理解することは非常に意義あることと思われる。よって，本論文の始めに「アーンストの事例」の再検討をしたい。

2．TATの誕生

H.A.Murrayは人格学の構築を目指し，人格探求の一助としてC.D.MorganとともにTATの最初の試案を1935年に小論文『A method for investigating fantasies』で発表し，1943年に現在のハーバード版を完成させた。Murray(1943)はその分析方法について「欲求—圧力分析」を勧めている。得られたTAT物語を主人公の持つ欲求と，環境が主人公に与える圧力との関係において分析するこ

とで創り手のコンプレックスを明らかにしようというのがMurrayの提案である。欲求―圧力分析は，TATの分析法として生まれたものではない。MurrayがTATの分析法として欲求－圧力分析を勧めた背景には，Murrayの人格理論と，人格研究に対するあり方が深く関わっている。Murray（1938）は，生活体は誕生から死に至るまでの，時間に関連を持った活動の無限に複雑な系列から成り立っていると考えた。その生活体の全時間系列の全体から任意に選択された一部分をエピソードと呼んだ。生活体はエピソードの連続体であるとし，エピソード研究を人格研究の有効な手段とした。エピソードの構造は生活体が置かれている環境とそれに対する生活体の反応の力学的な相互作用の過程からなりたっていると考えた。Murrayは，生活体に影響を及ぼす環境の力を圧力と呼び，圧力に対する生活体の内的な反応を欲求と定義した。エピソードに現れるこの欲求―圧力構造は主題（テーマ）と呼ばれる。TATの最初のTが意味するThemeはMurrayにとってはエピソードの欲求―圧力関係を示している。彼は（1938），著書『パーソナリティの探求』の中で様々な方法でエピソード集めをしており，抑圧されたエピソードを引き出す道具としてTATを用いている。この書は，Murrayを指導者として，27人の心理学者の協力を得て報告された研究報告である。

Murrayらによる人格研究は次のようなスケジュールであった。1．協議面接，2．自叙伝，3．家族関係と幼児期の記憶，4．性的発達，5．現在のジレンマ，6．会話，7．予想と感情傾向検査，8．質問紙法，9．能力検査，10．美術的鑑賞検査，11．催眠検査，12．欲求水準検査，13．抑圧の実験的研究，失敗の記憶検査，14．禁令の背反，道徳規範検査，15．観察と実験後の面接，16．感覚運動学習検査，17情緒的条件付け検査，皮膚電気反応，震顫反応，18．主題統覚検査（TAT），19．創造的生産性の検査，20．音楽的幻想検査，21．劇的検査，22．ロールシャッハ検査，23．その他の検査方法，24．フラストレーションに対する反応，25．社会的交渉，であり，総計約36時間（期間にして，3，4ヶ月）を必要とするものであった。以上のような面接，実験，検査が行われ，臨床的および実験的に人格研究がなされた。『パーソナリティの研究』の原書は，『Explorations in Personality ? a clinical and experimental study of fifty men for college age』である。原題からも，この研究が探索的なものであることがわかる。『パーソナリティの研究』の中で，一つの事例が挙げられている。「アーンストの事例」である。

アーンストの事例では，これらの面接，実験，検査から，実際どのようなエピソードが得られたのかが記されている。一人の対象に対するエピソードとしては実に膨大である。Murrayらは，それぞれの面接，実験，検査について，エピソードに表された主題を拾い出している。最終的には，全ての面接，実験，検査をまとめた心理図表と呼ばれるものを描くことを試みている。心理図表は「抽象的伝記」とも呼ばれる。つまりは，それぞれの面接，実験，検査から得た主題より，被検者の中心的な主題を見出し，その主題を通して，被検者のエピソードを読み直し，被検者の人物像を描く試みである。

3．「アーンストの事例」

アーンストは，24歳の工科大学の男子学生である。TATの検査者は，C.D.Morganが担当している。アーンストの事例の中で，アーンストの9つのTAT物語が載せられている。以下にアーンス

トのTAT物語を示す。各物語の最後の括弧はMorganによる欲求―圧力の図式である。pは圧力，nは欲求である。

3．1　アーンストのTAT物語

TAT物語①*1)「・・・これは父親が怒っているところです。息子がハロウィンの夜に，悪友といっしょになって，自動車のタイヤの空気を抜いてしまったからです。・・・父親は，自分の自動車のタイヤから空気が抜けているのを発見したので，どうやってその子を罰してやろうか，と考えているところです。・・・彼は怒鳴りつけ，ぶんなぐるのでしょうけど，ひどく傷つけることはしないでしょう。」(n攻撃：破壊<犯罪>→p攻撃：打つこと<罰>)

TAT物語②*2)この小さな男の子は，炭坑地方の一精錬工の息子です。・・・この子は寒さにふるえみじめな子です。・・・彼は，父親の働いている工場をみつめています。・・・大きな工場の姿が化物のようにみえるので，こわがっています。この地方では，なにか悪いことがおきるのではないか，と思っています。自分はここで働きたくないと思っています。この感情がたかまって，野心をもやし，自分の力で教育をうけたいと思うようになります。ついに，彼は教育者になります。精錬所の労働者たちに，自分たちが踏みつけにされていること，大きな有力な資本を打ち壊さなければならないこと，などを教えようとします。彼は社会主義者になって，成功した生活を送ります。」(p無支持：貧困と支配：強制→n自律とn成就（知的）→n支配：攻撃の煽動)

TAT物語③*3)「この若者は，なにか不満をもっています。なにか楽しいことはないか，と探しています。なにをしてよいか，わからなくなっています。ほとほと退屈しています。今のところ，自分自身にいやけがさしています。なにかしでかした人々のことを書いた物語のことを思いかえしています。自分が英雄であったら，あるいは，自分と同一視できるような英雄がいたらいいのに，と考えています。ぶらぶら過ごしているのでなく，なにか役立つことをしているのだったらいいのに，と考えています。もし，彼がふつうの14歳くらいの少年であったら，呑気なことは考えておれなくて，世のなかに出ようとしているでしょう。」(p単調とp排除：両親の無関心→理想我とn成就)

TAT物語④*4)「これは，他の絵のつづきです。おそらく，この若者は農場労働者で・・・自分の現状にあまんじてはいけない，と自分にいいきかせています。逃げ出して，自分がやるべきだと思っている生活にはいりたいと思っています。・・・彼は出世する道をみつけます。」(p単調→n排除：脱出→n成就)

TAT物語⑤*5)「この男は意識を失っているのです。酔っ払っています。どうにもうだつがあがりません。楽しく生活するために，なにかしなければならぬと感じています。・・・飲み過ぎて，すっかりのびてしまいます。」(p排除：社会的無関心→遊興→死)

TAT物語⑥*6)「催眠術者が，この若い男の金をとろうとしています。彼は不らちな奴で，青年の両親がたくさんの金と宝石を，家の金庫にしまっているのを知ったのです。青年が金庫の数字合わせ錠をしまっています。・・・催眠術者は，奇妙な薬で青年を酔わせます。青年が半睡状態になっている間に彼を意のままにしたのです。・・・青年から金庫の数字の組合せをしろうとしているところです。催眠術者は罠にかかって強奪の罪で捕えられます。青年は・・・催眠術者の呪縛から脱して，正常な生活をはじめます。・・・この絵では，催眠術者は力のある人間ではなく，

若い人です。それでは催眠術にかかりません。」(p支配：強制とp認知：尋問とp獲得：強奪→n傷害回避：逃走とn攻撃：投獄（罰))

TAT物語⑦*7)「この若い方の男はある銀行の行員で，賭博をやっていました。年を取った方の男に借金をしています。年を取った方の男は，彼に銀行と後ろ暗い取り引きをさせようとしかけています。若い方はこれに反対します。 良心からではなく，そんなことをすれば自業自得になるからです。青年は知恵があるので・・・その男の支配からのがれる方法を見つけるでしょう。それは思い切った方法でしょう。年を取った方を暗闇に連れ出して，静かに首をしめ，崖から投げ込んでしまうのです。」(p支配：強制的獲得：強奪（犯罪）→n攻撃：殺人)

TAT物語⑧*8)「老人の方は，金を儲けようとしている守銭奴です。この青年を手伝いにやといます。・・・この２人は，今，老婦人が管理している金を，もっとうまく手に入れる方法について相談しています。・・・ずっと何年も前に，その老婦人には一人の息子がいました。彼は完全に消息を絶って見つかりませんでした。この老人はそのことをしっており，評判のよくないこの青年を婦人の息子ということにしておしつけようとしているのです。こういうことは，正義のために，うまくいってはこまります。・・・ある日，老婦人は，自分の息子にあったホクロが，この男にはないことを知って―，警察を呼びます。」(p支配：強制→n恭順：従順（n獲得：強奪）→p攻撃（罰))

TAT物語⑨*9)「・・・これは，夫婦です。・・・彼は解雇され，自分を失敗者だと感じています。・・・妻に勇気を出して話そうとしますが，自分が失敗したと思うと，くじけてしまいます。・・・彼女は彼を慰めます。・・・夜も遅くなってからのことです。彼女は彼にコーヒーをつくってやり，軽食をつくってやります。・・・そうすれば，勇気もでてくるかと思って。・・・翌日，彼は元気よく起き上がります。・・・後になって，自分の性にあった仕事をみつけ，幸福な生活をおくります。」 (n成就失敗→落胆→p養護：栄養→n成就（中和）成功)

3．2　Morganによる解釈

上記の９つのTAT物語は，Morganの報告で示されたとおりの順序である。アーンストの事例では，ハーバード版の図版にはないものが用いられている。また，どの図版がどの順番で用いられたのか，全部で何枚の図版が用いられたのか，明らかにされていない。Morganの報告は，解釈に従って，それに都合の良い順序でTAT物語を提示している。

Morganは解釈において，事例の提示の前に，まず，アーンストのTAT物語で中心的であった「主題」を示している。Morganは，アーンストのTAT物語に，「単調：不毛な環境」の主題が4度，「成就」の主題が４度，「犯罪―刑罰」の主題が４度，「成就失敗」の主題が３度，「落胆」の主題が3度，「支配：強制」の主題が４度起こっていると述べている。また，アーンストのTAT物語の理解のために，「彼がいかに激しく父親を恐れ，憎んでいたか」をはっきりさせることの必要性を述べている。こうした概観を最初に述べたうえで，アーンストのTAT物語を提示し，提示したひとつひとつの物語を検討しながら，解釈を行っている。

Morganの最初に示した「主題」は，それぞれの物語に現れる欲求－圧力構造を参考にはしているが，それに縛られたものではない。「主題」を表す言葉は，自由に直観的に選ばれている。Murrayらの主題はとても柔軟である。Murrayは主題を欲求―圧力構造と考えていたが，エピソー

ドからの主題の決定に，厳密な欲求—圧力構造を求めることはしていない。主題の決定は，検査者の読みに任されている。また，物語をひとつひとつ解釈した結果として主題が導き出されるのか，主題の決定を出発点にして解釈がなされていくのか，という解釈の手続きは明確には述べられていない。Morganの解釈から推測すると，最初に示された「主題」は，解釈の出発点であると考えられる。なぜなら，解釈は，その「主題」に辿り着くのではなく，「主題」をきっかけに広がり，深まりを見せているからである。Morganの最初の「主題」が，分析をせずとも，物語から自ずと直観的に得られる類のものであるということは，アーンストのTAT物語を読めば理解されるであろう。

Morganは，「支配：強制」に特に注目している。なぜなら，TAT物語⑥，⑦，⑧，それから内観において，繰り返されているからだ。それらよりMorganは，「年長者がなにかをぬすむために，若者を手先としてつかう」という共通点を浮かび上がらせている。また，TAT物語③，④などに見られる「単調」に，アーンストの嫌悪する「荒れ果てた環境」を指摘している。このようにして，Morganは重要と思われる「主題」が表現されているアーンストのTAT物語を提示して検討を行い，その物語ごとに解釈を進めている。その上で，Morganは，「被検者は，父をおそろしい略奪者として夢想していたようである。だから，一次的空想の内容は，次のようなものであったろう。『貪欲な父は，母からあらゆる滋養をとってしまう。そのために，私は渇きをおぼえる。』後には、『強制的な父親は，母に対する略奪計画を私に遂行させようと強いる。』そして，なにも提供しない母は，後に，ひからびた大地（砂漠）と同等視されるようになる。」と解釈＊10）している。

3．3　心理図表

Murrayらの研究において，面接，実験，検査が全部終了すると，伝記係が選ばれ，自分が割り当てられた個人について行われた観察や解釈を全部集め，これらをできるだけ全体としてうまく調和のとれるように整理し，理解でき，納得のゆくような一つの「肖像画」をつくることが課せられる。その「肖像画」をもとに，実験者全員による事例検討会が開かれ，最後に，伝記係が心理図表を読み上げる。アーンストの心理図表は，R.W.Whiteが担当している。アーンストの心理図表は，4つの主題を中心に描かれている。①口唇的求護の主題，②食料探索主題，③略奪の主題，④強制された強盗主題の主題が描かれている。心理図表における主題は，TAT解釈の始めに示される「主題」とは，少し性質が違うものと思われる。心理図表の主題はむしろ，Morganが最後に示した解釈と重なり合う。TAT解釈の始めに示された「主題」は，物語の概観にすぎない。筆者が，MorganがTAT解釈の始めに示したような「主題」を，括弧付きの「主題」とした理由はここにある。Morganは「主題」を入り口にし，アーンストのTAT物語に踏み込んでいる。アーンストの心理図表を描く上で重要な役割を果たしているのは，Morganの解釈である。TAT解釈の始めに示された「主題」は物語の「主題」であって，被検者（アーンスト）の主題と同義ではないのである。心理図表は，被検者の主題を示すものである。被検者の主題は，TAT物語に確かに表現されているが，それは物語の「主題」を抜き出すだけでは捉えることができない。そのためには，読み手（つまりは検査者）の解釈が必要となる。被検者の主題は，解釈の中で姿を現してくる。

心理図表のこれらの主題は，TATにだけではなく，他の検査や面接で，繰り返しアーンストが表現した主題である。Murray(1938)はTATについて，「これによって実験者は，無意識的な主題構成を予測するのに，きわめてすぐれた鍵があたえられた」と述べている。Murrayの述べたように，TATには被検者の主題が見てとれやすい。また，20枚の図版を用いるので，ある図版の物語から仮説的に主題を得た場合，他の図版においてその仮説を検証していくことができる。TATをひととおり施行すると，なにかしらの被検者の主題が浮かびあがってくる。Murrayが人格研究のスケジュールにTATを用いた理由は「無意識的な主題構成の予測」にあり，アーンストの事例では，TATはその役割を確実に果たしている。このように書くと，TATによって他では得ることのできない被検者の主題を得ることができるのではないかという誤解が生じるかもしれない。しかし，アーンストの事例において，TATで表された主題は他の検査や面接でも繰り返されている。つまり，TATで表される主題とは，様々な場面で，様々な形で，繰り返し，繰り返し出現するようなものであると言える。

3．4　読み手に与えられる自由

アーンストの事例で興味深いことは，TATにおける主題の表われ方が他の検査でのそれとは異なっている点である。例として，アーンストのTAT物語②を見てみる。この物語には，恐ろしい父の「略奪」の主題が表されている。この物語を読む時，被検者の「略奪」の主題がイメージとして広がるであろう。試みに，この物語から筆者が得るイメージを自由に述べてみたい。「寒さにふるえるみじめな子」は，非力で，包まれるべきものを持っていない。男の子の恐怖の対象は，父親そのものではなく，父親の働いている工場である。男の子の持つ恐怖は，理屈で説明のつくものではなく，化物に対するそれであり，得体のしれない，飲み込まれてしまいそうな緊張感である。この化物によって，自らが存在し，生活する場所が侵食されていく感覚に脅えている。おもしろいことは，男の子の恐怖の対象である父親の働いている工場は，父親がこの子を養うための賃金を得る場所であるということである。そして，この恐怖は突然野心に変わる。男の子は論理によって，対象と対峙する。・・・以上のように自由にイメージを描いてみたが，読み手によってイメージの広がり方はそれぞれであろう。また，今回はイメージに焦点を当てたが，TAT物語を読む時，読み手には，様々な感覚，感情，直観，思考が沸き起こるであろう。TATは物語である。物語をいかに読むか，物語からなにを受け取るかは全く読み手の自由である。この読み手が持つことのできる自由は，他の検査にはない，TATの持つ特徴である。

以上のように，アーンストの事例には，TATの重要な二つの特徴が示されている。１．様々な場面で，様々な形で，繰り返し，出現するような主題がTAT物語に表現されること，２．TAT物語から，読み手は自由なイメージを持つことが許されること。この二つの特徴は，とても基本的ではあるが，現在まで明確に提示されたことはない。しかし，この二つの特徴こそが，TATの魅力であり，Murrayらが，人格研究の方法としてTATを採用し続けた理由であると筆者は考える。

4．『パーソナリティの研究』以後

4．1　欲求―圧力分析

Murrayは，技法としてTATを確立することに熱心でなかったと言われるが，『パーソナリティの探求』以後に，TATの欲求—圧力分析のための分析表の作成を試みている（H.A.Murray & R.Nevitt Sanford,1939，H.A.Murray & Leopold Bellak,1941）。この動きにより，一つの独立した検査として，被検者の主題を取り出すことを目的とした研究の流れが生まれることになる。Murrayの研究を受けて，TATの分析方法としての欲求—圧力分析の研究が活発となった。欲求—圧力分析の研究は，Stein（1948）に踏襲された。

ここで，解釈と分析の違いについて述べておく必要があろう。安香（1997）の「分析というのは，個々の物語から被検者の人格の諸因子と見られるものを引き出し，それらの相互関連を検討できるようにすること，そして解釈というのは，それら諸因子を最終的なレポートの中で構造的に組み立てて，理論的に一貫した所見にまとめ上げること」という説明は，分析と解釈の違いをよく表していよう。アーンストの事例において，Morganは欲求—圧力構造を参考にし，欲求，圧力の図式を記しているが，それは分析といえるほど体系が整っているとはいえない。

Murrayに始まる欲求—圧力分析の方向は，物語の「主題」の構造を明らかにしようとするものであった。Stein（1948）が示した分析の場合に留意すべき項目は以下の通りである。1．主人公：欲求—圧力分析において，主人公の選定が第一にすべきこととされる。2．環境刺激：圧力など。3．主人公の行動：欲求。4．カセシックス：主人公が惹かれるあるいははねのける対象物，人，行為など。5．内的状態：顕在の行動だけではない，感情とか情緒。6．行動表出様式：行動の表れる仕方。7．結末：物語の結末。これに見られるように，欲求—圧力分析は，物語内容の分析に比重が強く置かれている。その大前提とされるものは，主人公投影仮説である。主人公を中心に物語内容を分析することによって，被検者の特性を知ろうとする。物語の「主題」の構造をそのまま被検者の主題としてしまう主人公投影仮説には大きな問題がある。物語の「主題」と被検者の主題は同義ではないことは先述の通りである。アーンストの事例において示されたように，物語の「主題」から，被検者の主題を考察するのには，検査者の解釈が必要である。TATの主人公投影仮説を基にした分析方法は，だんだんと，物語の「主題」の内容分析に主軸が移り，それに伴い物語の「主題」から被検者の主題に到る解釈の部分がお粗末になっている感がある。Steinは実際のTAT解釈に欲求—圧力の分析項目は全く用いてなかったという事実があるように，TATの解釈に，欲求—圧力分析はあまり意味を持たなかったのである。このような欲求—圧力分析から被検者の人物像に迫ることが不可能だったと言ったほうが良いだろうか。欲求—圧力分析は，緻密に物語の構造を分析するものとなり，物語の創り手である被検者との繋がりが薄れてしまう方向へと進んだようである。その上，欲求—圧力分析はとても煩雑で多量の時間と労力がかかり，臨床的な使用にも無理があるものであった。現在，伝統的にTATの解釈法として欲求—圧力分析は紹介されるが，実際用いられることは皆無に近いであろう。

4.2　事例研究

現在，TATの分析法，解釈法に主流というものは存在しない。このような中でTATを用いる場合，利用すべき分析法，解釈法がないにもかかわらずあえて，TATという検査を選んでいるということになる。TAT物語には，分析法，解釈法を介さずとも損なわない魅力が在るのだといえよう。つまり，TAT物語自体が持つ魅力，力である。それを引き出すのは物語の読み手であるとい

うことを，事例研究は浮き彫りにする。

藤田（1997）の述べた『分析手順の実際』は，現在のTAT実践家の態度をよく示していると思われるので，以下に記す。

（1）印象の形成：全ての図版のプロトコルを通して読み，全体の印象をつかむ。感想程度のもので良い。解釈するのは我慢し，心に留めたままにして，次の段階へ進む。

（2）特徴のチェック：各図版のプロトコルを読み，気づいた点をメモする。特に大切なのは，どうしてその特徴に着目したのかを考え，そこからどんな人格特徴が引き出せるかという意味づけを，特にある理論にこだわらずにすること。

（3）特徴の整理：各図版の物語から抜き出した特徴，それに付随する仮説を眺め，整理し，書き直す。

（4）共通特徴の抽出：いくつかの物語に共通して見られる特徴を抽出する。

（5）図版ごとの物語の特徴の再検討とまとめ：図版ごとの物語特徴とそれに付記した仮説を再検討し，図版ごとのまとめを作る。具体的には，（3）で整理した共通の特徴や際立った特徴を参考にしながら，あらためて各図版の物語を読み直し，物語の特徴や仮説を検討し直す。

（6）各図版の物語の重みづけ：各図版の物語の特徴に対する仮説に重みづけをする作業。

（7）総合解釈：重みづけを加えられた物語の諸特徴を構造化する。物語の諸特徴から被検者の人格の核となる基本特徴を見つけだし，それを軸にして他の諸特徴を組み合わせ，一つの人格像にまとめる。

藤田の分析手順は，解釈方法でも分析方法でもない。文字通り手順である。特徴を整理する枠組みも，これだというものは指定しておらず，「ケースごとに工夫して作ることが多くなる」と述べている。藤田の分析手順は，TAT解釈における，そのTAT物語を読む個々の読み手の重要性を示している。TATは，心理テストとして，客観性を幾度となく求められてきた。それゆえ得点化や結果の整理法を初めとする解釈方法や分析方法が研究されてきた。その研究の間に個々の読み手の直観や主観のあり方が置き去りにされてきた印象がある。欲求—圧力分析もその流れにある。しかし，それらの研究は結果として，そういった方法がTATにはなじまないことを証明してきたことになる。TATの解釈には，読み手の感覚，直観，思考など，読み手が物語から受け取るいわば主観的な領域が非常に重要であると考える。安香，藤田ら（1997）の『臨床事例から学ぶ—TAT解釈の実際』では，いくつかの事例とその解釈の実際を記している。その中では，読み手の立つ解釈理論，読み手が受けた印象，読み手の仮説がなによりも大切に扱われている。

アーンストの事例でも，Morganは得点化や分類など，結果の整理法を必要としていない。各物語の最後に記された欲求—圧力の図式は，解釈の道標程度の働きである。Moragnは物語の「主題」から被検者の主題を考察するうえで解釈をしていることは先述した。解釈の方法論については述べられていない。Morganの解釈を見ると，直観を初めとする自らの主観的な領域を頼りとしている。最初の物語の「主題」の決定からして，直観的である。その上で，物語の解釈にアーンストの内観を何度も引用している。被検者の内観はTAT誕生の最初より，Murray(1935)も重視している。読み手の直観や主観を用いる時，物語の解釈に読み手の投影や勝手な押し付けが影響する危険性をどうしても含んでくる。そのため，解釈にあたって，読み手の外側に在る尺度を必要としたのだと考える。

4．3　図版の規定性

読み手の直観や主観を補助するものとして，図版の規定性の研究があると考える。TATには，図版に規定される(stimulus oriented)部分と，被検者の内界に規定される(concept dominant)部分の相互作用によりなっている。前者を図版規定性と呼ぶとすれば，Morganは「アーンストの事例」で，図版の規定性についてはほとんど言及していない。MurrayやMorganらの研究では，図版はまだ選定される段階であった。Murray&Morgan(1935,1938)は図版について，「絵は，それぞれなんらか危機的場面を暗示し，それに関連して空想をおこさせるようなはたらきをもってなければならない。また，一組の絵のなかには，あらゆる場面がふくまれてなければならない。理想的にいえば，それぞれの被検者が容易に感情移入することができ，自己と同一視しうるような人物（感情を喚起する対象）が，ほとんどすべての絵に少なくとも１人はいなければならない」と，述べている。このような条件に合う20枚の絵のセットが，数百枚の絵から選ばれた。

TATの事例が集まるにつれ，異なる被検者であっても，図版に見られやすい反応特徴があるということが明らかになり，図版の規定性について注目されるようになってきた。例えば，アーンストの事例におけるTAT物語④をみてみよう。この物語はハーバード版の図版14についての物語である。この図版は人物と窓のシルエットであり，人物は窓に手をかけている。この図版では，脱出，逃亡の話が作られることは少なくないことが報告されている（鈴木，1997)。よって，この図版のTAT物語で脱出が表されていたとしても，それは被検者のみの要因ではないということが考えられるようになってきた。図版の規定性の研究は，主に（１）図版の特徴，（２）図版の反応分類，（３）図版に期待されるテーマ，（４）シリーズ性を挙げることができる。

（１）図版の特徴：坪内（1984）は，「各図版の刺激特性に対応した反応解釈をしなければならない」と述べている。坪内の示した刺激特性は，刺激としての図版の特徴である。ロールシャッハ・テストのサイン・アプローチを念頭に，TATの各図版に，D，d，Ddという反応領域を設定している。Dは主要部分であり，誰もが認知し，物語に取り入れ，主要な筋，主題を作るのに用いる絵の主要な部分である。dは小部分であり，筋，主題の設定に直接には必要不可欠ではないが，よく認知される絵の小部分である。Ddは，特異部分であり，めったにしか認知されない絵の小部分，微細部分，特異部分と，画面全体の暗さなど絵の特異部分である。先程の図版14では，Dは男性（または女性)，dは窓，窓の明るいこと，Ddは画面の黒色，ということになる。

（２）図版の反応分類：鈴木（1997）は，各図版ごとに，その図版で生ずる反応を集積し，集積された膨大な数の反応を，その図版ごとの分類枠で分類している。これによって，そのカードで生ずる可能性のある反応の包括的かつシステマティックな知識を得られるとしている。鈴木は，この知識を利用して直観を働かすことを研究の目的としている。鈴木の研究によって，各図版ごとに，どのような反応がどのような割合で出現するのかが明らかになった。アーンストのTAT物語④を念頭に，図版14の反応分類を見てみると，健常大学生男子のおよそ半数がこの図版に対し「現在の状況からの『脱出』が顕在的・潜在的に問題になっているとみなされる」物語を創っている。また，そのうちの半数以上が「心理的次元ないし象徴的次元での脱出が問題になっている」。つまりこの図版には，このような反応を与えやすい側面があり，アーンストの反応は珍しいものでないことがわかる。このような反応は標準反応とも呼ばれる。この場合，標準的な反応だ，で

終わってしまったり，TAT物語に対する被検者の要因が少ないと考え，この反応には意味がないと考えるのは早まっている。「脱出」という反応が出現しやすい図版で，「脱出」の物語を創ったということからだけでも考えられることはいくつもある。また，同じ反応であっても，一言一句同じであるということは，あり得ない。表現は被検者ごとに様々である。

筆者は「脱出」はアーンストのもうひとつの主題であると考える。父親からの，ひからびた環境からの脱出は，他のTAT物語の中でも顔を覗かせている。「脱出」という反応が出現しやすいこの図版14は，アーンストの「脱出」の主題を誘発したといえるであろう。実際にアーンストは農場の家で育ち，父親に農場の仕事を手助けさせられることに激しい抵抗を感じていたことは，内観や自叙伝で述べられている。アーンストは物語の若者をあえて農場労働者としているところに，この物語における意識的な働きの強さを感じる。「脱出」の主題は，アーンストの意識に近い部分にあるのではないだろうか。そして，「自分にいいきかせています」からは，ともすると現状に漂ってしまいそうな状態を感じる。逃げる先は「自分がやるべきだと思っている生活」であるが，具体的，実際的には見えてこず，観念的である。このように，鈴木の反応分類を頭に，アーンストの事例を眺める時，鈴木の反応分類は外枠の守りとなり，解釈の可能性を広げることを感じる。

（3）図版に期待されるテーマ：Henry(1956)は，図版ごとに，その図版特有な情緒的主題を持っているとし，それを潜在的な刺激特性と呼んでいる。図版14は，個人の胸の内にある野心めいた願望を言語化するのにふさわしく，中産階級の人びとにとっては，就労生活でのさまざまな野心の主題を浮き彫りにするとある。

（4）シリーズ性：シリーズ性とは，図版番号順に時系列に並べた時に持つ，各図版の役割についてである。図版１の導入カードとしての意味は，Bellak(1954)や坪内（1984）他，多くの研究者が言及している。

図版の反応分類の項で述べたように，図版の規定性を知ることによって，読み手は外枠の守りを作ることができる。これによって読み手の直観や主観が助けられる。

5．展　　望

筆者がTAT物語を捉える時に頭においておくと有効であると考えていることを以下に記す。細かなことはいくつもあるのであるが，中心的な２点を代表して挙げておく。また，その点から，筆者のアーンストのTAT物語の捉え方も少しであるが示してみたい。筆者はこのように解釈を始めるという紹介である。

（1）TATに表されている主題は，被検者の中で繰り返されている主題であるということ。：「アーンストの事例」で明らかになったとおり，TATで表される主題は，様々な場面で，様々な形で，繰り返し，繰り返し出現するようなものである。まず，一連のTATにおいて主題が繰り返される場合はそれに注目する必要がある。また，TAT以外の場で得られた主題（例えば面接など）がTATにおいてどのように表現されるかも視点に入れておくべきであろう。繰り返される主題も，TATでは，TATならではの表現のされ方をする。

「アーンストの事例」のTAT物語において，筆者の注目した主題は「操作されること」「ひからびた環境からの脱出」「成功と不成功」などである。ここでは，「操作されること」の主題に限って述べてみたい。アーンストのTAT物語において，操られの場面が何度も登場する。それは，人物の意志の働きを奪われるような操作である。TAT物語②では，なにだか得体の知れないものに少年は覆われそうな恐怖を持っている。TAT物語⑤では，男は酔っ払っていて，自らの意志が働かない状況にあるばかりか，意識を失っている。TAT物語⑥では，催眠術者は青年を酔わせている。青年は半睡状態の中で催眠術者の意のままとなっている。TAT物語⑦では，年を取った男は，若い男に後ろ暗い取引をさせようとしている。物語⑤⑥では，全く手も足も奪われているような状態である。物語⑤のような中でも，なにかしなければならぬと感じている。操作されることに一時は身体を預けているが，それに強い抵抗を示し，引き戻しを試みている。物語②では，ここで働きたくないと，その場からの回避を願う。「操作されること」の主題は，「脱出，回避」の主題へとつながっていく。

（2）イメージを広げること。：これはあまり論じられていないことのように思うが，TAT物語からイメージを広げることによって，多くのことを得ることができると，筆者は感じている。そのひとつの方法として，筆者は物語から五感を働かせるということを試みる。感覚は，多かれ少なかれ二者の間で共有できるものであり，それは創り手へつながる足掛かりになり得ると考えている。

アーンストのTAT物語において，先ほど示した「操作されること」の主題において，イメージを広げてみよう。TAT物語⑤はとてもイメージを広げやすい。酩酊の状態を思い浮かべてみればよい。かろうじて意識はあるが，手も足も思うように動かない。どうにか意識を保とうとするがともすれば，流されてしまいそうだ。しかも，自らの意志の利かないこの状態に心地良ささえ感じてしまう。

TATの誕生より，TAT研究を再検討してきた。現在のTAT研究は，読み手の主観領域への回帰の方向にあると考える。これまでの研究は，TATには標準化された分析法はそぐわないことを明らかにしている。個々の読み手は自らの主観領域を働かせる必要がある。それには確実な方法は存在するはずもなく，唯一の方法は修練としか表現できないようなものである。解釈の仕方はそれぞれの読み手によって異なる部分もあってしかるべきである。個々の読み手によって合うやり方，合わないやり方もあるであろう。自らにフィットするTATの捉え方を見つけていくことが重要であり，それを援助するようなものが今後の研究に望まれると考える。

脚　　注

*1) ハーバード版にはない図版。中年の男が顔をつき出し，拳をかためて前に屈んでいる。

*2) ハーバード版にはない図版。一人の少年が垣によりかかって，遠くにぼんやりと輪郭のみえる工場を眺めている。

*3) ハーバード版の図版３BM。アーンストの事例では，ハーバード版と異なる図版番号がつけられている。

*4) ハーバード版の図版14。

*5) ハーバード版の図版18ＢＭ。

*6) ハーバード版の図版12M。
*7) ハーバード版にはない図版。青年が年長の男とむかいあってすわっている。後者は，ある論点を強調するかのように手を広げている。
*8) ハーバード版の図版７ＢＭ。
*9) ハーバード版にはない図版。若い男が，若い女の膝に頭をうずめて，女はやさしい表情で男の方に身をかがめている。
*10) MurrayやMorganの解釈には，精神分析の影響が多分に見られる。

参 考 文 献

・安香宏，藤田宗和（編）1997　臨床事例から学ぶTAT解釈の実際．新曜社．
・Bellak, Leopold　1954　The Thematic Apperception Test and the Children's Appercetion Test in Clinical Use. Grune & Stratton. New York.
・Henry, W. E. 1956 The analysis of fantasy. The thematic appercetion technique in the study of personality. John Willey&sons. New York.
・Morgan, C. D. &Murray 1935 A method for investigating fantasies. Archives of Neurology and Psychiatry, 34
・Murray, H. A. et. Al. 1938 Explorations in Personality. Oxford. New York.
(マレー　外林大作（訳）1961, 1962　パーソナリティⅠ, Ⅱ.　誠信書房.)
・Murray, H. A. &Bellak, Leopold 1941 Thematic Apperception Test Blank. Harvard Psychological Clinic.
・Murray, H. A. 1943 Thematic Apperception Test:Manual. Harvard University Press. Cambridge.
・Sanford, R. Nevitt 1939 Thematic Apperception Test-Directions for Administration and Scoring. Harvard Pshchological Clinic. Cambridge.
・Stein, Morris I. 1950 Thematic Apperception Test:An Introductory Manual For Its Clinical Use With Adult Males. Addison Wesley Press Inc. Cambridge.
・鈴木睦夫　1997　TATの世界―物語分析の実際．誠信書房．
・坪内順子　1984　TATアナリシス．垣内出版．

（博士後期課程２回生，心理臨床学講座）

re-consideration on the Thematic Apperception Test

UMIMOTO Rieko

The thematic apperception test (TAT) is known to be a personality test in which a subject is asked to make a story for each picture shown. This article aims at re-thinking TAT from its origin how this test was made. This study reveals that when interpreting TAT results it is important to notice the subjective influences on the examiner's side. Concerning psychological tests in general, subjective effects of an examiner is regarded to be undesirable. However, the current study concludes that it is extremely meaningful to notice the usefulness of an examiner's subjective features in TAT.

A book written by Murray and Morgan (1938), *Exploration in Personality*, is a very useful volume to know the starting point of the TAT. This reading informs Murray's and Morgan's attitudes towards TAT practice as well as how TAT was used when it was a newly invented method. This book clarifies two important features of TAT: 1) the same theme told in TAT is repeatedly expressed in many other situations in various; 2) an examiner reads TAT stories imagining freely. When one reads TAT stories, s/he cannot help experiencing numerous sensations, feelings, insights, and thinking. It is almost amazing to find out how often the authors use their own lively senses on interpreting TAT. This early volume suggests the ways to interpret TAT deeply through an examiner's subjective senses.